

図書 紹介

エイズ、鳥インフルエンザ、サース・・・

動物ウイルスが人間を襲う！

著者：中島捷久（名古屋大学医学部）・澤井 仁（日経メディカル開発）

発行：PHP研究所 / 102-8331 東京都千代田区三番町 3-10 / 03-3239-6221（編集） / B 6判

/ 246 頁 / 価格 1300 円（税別） / 2006 年 12 月 18 日発行

一旦は収まったかに見えた高病原性鳥インフルエンザが今年 1 月に入って宮崎県、岡山県の養鶏場で発生し、大量処分と消毒に追われた。原因は「渡り鳥の糞がネズミなどに付着して鶏舎に持ち込まれた可能性が高い」（農水省チーム見解）との見方が示された。昨年、ウイルスに関する図書として、「インフルエンザ危機」（34 巻 3 号）、「ノロウイルス現場対策 その感染症と食中毒」（34 巻 6 号）、「感染爆発 鳥インフルエンザの脅威」（34 巻 12 号）及び「感染症」（35 巻 3 号）を紹介した。今回はその 5 弾である。そのテーマは「ウイルスとの戦いの時代がやってきた」とあるように新しい動物ウイルスが突如として我々の社会に出現するという現象が次々に起こり始めており、エイズもそうした現象のひとつであり、SARS（サース）や鳥インフルエンザなど、感染すると 5 割は死亡するという恐ろしい致死率を示すウイルスも出てきている。その意味で本格的なウイルスの時代に入ったといえる。本書は、次の序章、第 1～7 章と終章から構成されている。

序 章 ウイルスの恐ろしさ

第 1 章 ウイルス時代の到来

第 2 章 ウイルスの脅威

第 3 章 動物ウイルスの襲来

第 4 章 鳥インフルエンザの謎

第 5 章 猛威は続くエイズ・ウイルス

第 6 章 忍び寄るガン・ウイルス

第 7 章 ウイルスの予防と治療の試み

終 章 長い戦いが始まった

次にサブタイトルを羅列すると、序章では清潔な所ほどウイルスに感染すると重症になる、「インフルエイズ」ウイルスの可能性、ウイルス兵器の製造、第 1 章では人類に押し寄せるウイルスの生活圈、細菌学の黄金時代、インフルエンザの襲来など、第 2 章ではある時は無生物ある時生物、細菌より役者が上、ウイルスは巧妙に変身する、効く薬が少ない、古代からのウイルス、身の回り

のウイルス、新しいウイルス病の可能性などである。次いで第3章では生物は自然発生しない、サルから突然感染した、ラッサ熱、エボラ出血熱の恐怖、出血熱の変わり者、SARS（サーズ）の来襲、ウイルスは自在に変化する、変身王はインフルエンザ、遺伝子1個の凶悪化、遺伝子組換えで新ウイルスの誕生、インフルエンザ変身の謎、変身で動物から人へ感染など、第4章では高病原性H5型の到来、一旦は収まったかに見えたが、アジアから世界への広がった、人から人への感染の恐怖などである。

さらに第5章では免疫機能異常が共通、エイズ・ウイルスの発見、エイズ・ウイルスの怖さ、エイズ・ウイルスの起源、世界で4000万人に感染、患者発祥のメカニズム、エイズは死の病ではなくなった、第6章ではガン・ウイルスの本性、ガン・ウイルスの発見、研究の進展は50年代から、人のガン・ウイルスの発見、レトロ・ウイルスに注目、人のガンもウイルスでできるなどと続き、第7章ではウイルスを狙うと生命もやられる、生ワクチンの長所と限界、不活性化ワクチンは有効期間が短い、遺伝子工学でワクチンを作る、抗ウイルス剤開発の波、夢のウイルス逆利用作戦など、終章では戦いは遺伝子レベル、分からないことが多すぎる、ウイルスは進化するなどである。

高病原性鳥インフルエンザの人への感染が間近に迫っていると言われている。その対策としてのワクチンは、「プレパンデミック（大流行前）ワクチン」といわれ、東南アジアなどで流行した鳥インフルエンザをもとにしたものでその効果は未知数であるという。また、予防や治療に有効な薬である「タミフル」は、医療機関や国・都道府県も備蓄しているものの使用されず使用期限を迎えたらどうなるのかの問題も浮上している。ワクチンも薬も大流行したらすべてに行渡るとは限らない。まずは手洗いやマスクなど一人ひとりの予防や人に接触する機会を減らす自衛が先決であろう。

（学会事務局）